

環境問題に対する民族を越えた取り組み

秋山 知宏 (名古屋大学大学院環境学研究科・総合地球環境学研究所)

黒河流域の環境問題

水は、われわれ人類を含む生物にとって、その生存に不可欠な物質である。黒河流域では比較的降水量が多い山岳域の降水を起源とする河川水と地下水とを頼りに人びとは生活を営んできた。しかし、河川や湖の枯渇、地下水位の低下、それに伴う植生の枯死や沙漠化が深刻な問題になっている。中流域で農耕を基盤として暮らしてきた漢族も、下流域で遊牧を基盤として暮らしてきたモンゴル族のいずれもが、水に関連する問題で悩んでいる。

下流域で出会った人びと

水不足の原因を明らかにするために、2001年夏、私は初めて黒河流域を訪れた。それ以降、私はとりわけ

下流域、すなわち内蒙古自治区額濟納旗を毎年訪れるようになった。地下水の調査をするために、遊牧民が保有する井戸を求めて一軒一軒訪ねた。

彼らにとって私は見ず知らずの他人であった上、突然の訪問であったにも関わらず、お茶を出し、迎え入れてくれた。歓迎のお酒をいただいたことも、一晩泊めていただいたこともしばしばあったし、ときにはその場で絞めた山羊をごちそうになったことさえあった。

年をまたいで再び同じ家を訪ねてみると、再会は一筋縄にはいかなかった。彼らが季節的に移動していたためだろうか。理由はそうではなかった。



写真3 孫に中国語を教えるモンゴル族のツェルンさん(2004年5月撮影)。明治安田生命「第二回マイハピネスフォトコンテスト」佳作。



写真1 流域の末端部における黒河の様子(2002年1月撮影)



写真2 放棄された井戸(2002年6月撮影)

環境保全事業

黒河流域の生態保護を目的として、中国水利部は「黒河工程与非工程措施3年实施方案」を2002年に批准した。それには、30万亩の河畔林の柵による囲い込み、4万亩の家畜飼料基地の建設、110眼の機械式井戸の建設、1500人の生態移民が含まれていた。生態移民とは、生態環境が悪化した直接的な原因は現地の遊牧民であるという考えのもと、彼らをそこから他の地域に移すという政策である。額濟納旗中心地には移民村と呼ばれる小規模な街が建設され、飼料栽培を前提とした畜舎飼育が推奨された。家畜飼料基地や機械式井戸の建設には、そういった意味があった。

こうした試みは本当に効果的であるのだろうか、返って逆効果になることがあるのではないだろうか。2005年にNHKで放送された「NHKスペシャル 新シルクロード 第8集 カラホト 砂に消えた西夏」には、

生態移民政策に必死に抵抗する遊牧民の姿が映されていた。遊牧は、家畜の群れによる植生への負荷などを「移動」によって分散させることで成り立つ。一カ所に定着してしまったら、環境への負荷を分散させることができない。そればかりでなく、飼料栽培のための新たな水需要を生じさせる。返って、環境への負荷を大きくしてしまう可能性がある。

冒頭で述べた一連の環境問題の主たる原因は、下流域の過放牧というよりもむしろ、中流域における灌漑農地の過剰拡大に伴う河川水と地下水の過剰利用であることがオアシスプロジェクトを通じた研究によって明らかにされた。すなわち、中流域と下流域の水の分配をめぐる問題であった。

たしかに、水の分配方案は政府主導のもと試行錯誤されてきた。しかし、中流域で河川水の取水制限を行った結果、地下水の揚水量が増大し、急激な地下水位の低下を引き起こした。そればかりでなく、河川への地下水流出がほとんどなくなったため、下流域の河川流量は減少し続けた。また、下流域に対する放流のタイミングにも問題があった。下流域で聞き取り調査をすると、秋に集中的に放流されるようになったがそれでは草が育たないとか、むしろ洪水になって困るといった意見をよく耳にした。下流域の生活様式が反映されているとは言い難いのである。このように、水の分配方案には、まだ多くの課題が残されている。本来、中流域と下流域とが一体となって考えなければならない問題のはずである。

私が必要であると思う視点

黒河流域に限らず、近年の環境問題の顕在化に伴って、それを改善しようとする多数の試みがなされるようになってきた。そうした試みを実践しようとする人びとは、その土地の理想的な将来像を描く。しかし、それはそこに暮らす人々が本当に望んでいることなのだろうかとの疑問を持つことがある。つまり、それによって犠牲になることの方が価値は重く、結果として彼らが望まない将来像なのではないだろうかと感じるのである。我々の認識と彼らのそれは多かれ少なかれ「ずれ」があるはずである。文化的な背景が異なるから当然であろう。最新の情報を提供し啓蒙することは重要

であると思われる。ただし、そこに暮らす多種多様な人々の口から得られる情報を通して、その場で起こっている問題をどう捉えるか判断することを忘れてはならないであろう。

そう考えると、地域に即した解決策が導入され、それが維持されるためには、トップダウン的に提案されるだけではうまくいかないだろう。異なる生業を営む人びとが民族を越えて同じテーブルに座り、新たな解決策やそれを維持するための方法論を考える必要があるのではないだろうか。このようなネットワークの構築は、新たな方向性を見出す第一歩になるに違いない。たとえば、移住しなくとも環境に負荷を掛けない牧畜方法があるかもしれないし、経済的な損失を産むことなく環境に負荷を掛けない農地や水の利用方法があるかもしれない。

写真4に映っている右の青年は上流域に暮らす漢族で、その左は下流域に暮らすモンゴル族である。同じ目的を持って一つの仕事を成し遂げた夜に開いた宴会の席の一場面である。漢族の青年はモンゴル族から「ジャーハンダイ(小さくてかわいいやつ)」と呼ばれて親しまれている。若輩者の考えと言われるかもしれないが、民族を越えることは不可能ではないと信じている。底からの地道な努力が新たな道を切り開くはずである。



写真4 モンゴル族のナスンさん(左)と漢族のツァオさん(右) (2004年9月撮影)。